
悪魔か天使の女の子

美夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔か天使の女の子

【Nコード】

N9163R

【作者名】

美夢

【あらすじ】

登場人物に天使か悪魔の女の子（崎野または優美香）が入っている短編小説をまとめたものです。

洗濯ばさみ（前書き）

（ 崎野 編 ）

洗濯ばさみ

「その少年、ちょっと、キミ」

どこか遠くから声がするので、僕は左右をみる。人はいない。

「そうキミ、上だよ上」

声主に従い上を見上げると女性がいた。

マンションのベランダから手を振る女性。恐らく彼女が声主だろう。

「悪いけど、そこに洗濯バサミが落ちてないかな」

言われて地面を見る。洗濯バサミが落ちていた。気付かなかった。

あります、と大声で言うのが恥ずかしいので、洗濯バサミを拾い手を伸ばす。見えるだろうか。

「そう、それ。よかった」。それさ、悪いけど上まで持って来てくれない？413号室」

僕は学校に行く途中だったが、時間には余裕がある。

それに、なんとなく断り辛かった。大声で、無理ですと言うことは、少し勇気が必要だ。

部屋を確認する。413号室。間違いない。

僕はブザーを押した。「はい」女性の声が聞こえた。

遠目では分からなかったが、出てきた女性は思ったより若かった。

20歳前後だろうか…。高校1年の男子に年頃の女性の年齢を当てるのは難しい。

女性は僕に、お礼と労いの言葉をくれ、ココアまで勧めてくれたが、それについてはさすがに遠慮しておいた。

「これから学校なので」

女性は少し残念そうにしてから、「ちょっと待って」と部屋に入り、包装されているお菓子をくれた。

「よかつたら、また来てね。美味しいココアもらったんだけど…私一人じゃもつたいなくて。誰かに飲んでもらいたかつたんだ」
僕は適当にうなずいた。少し不用心な気もした。

この女性の外見は男の心を揺すぶるのにそれほど苦労しないだろうと感じられる、つまり美人だった。

僕には自分にはもつたいないほどの可愛い彼女がいた。付き合って1カ月だ。

だから、この時は洗濯バサミの女性を見ても運命的な出会いと感ずることもなく、学校に着いた時には忘れているほどだった。
電車で席を譲る、その程度の印象だった。

それから1年後、あのマンションで飛び降り自殺があった。

あのマンションは、僕たちの学校から近い位置にある。学校まで徒歩で通う僕の通学路でもあるくらいだ。
事故当日もマンションの前を通ったが、そういえば少し騒がしかったかな、と感じた程度だった。

「20代の、若い女性だったんだって」
僕にはもつたいない可愛い彼女は、あれからも順調に付き合い、1年が過ぎていた。

その彼女が暗い表情でクラスメイトから聞いた噂を僕に話してくれる。

僕は洗濯バサミの女性を思い出して胸騒ぎがした。

「遺書もあって、いろいろ疲れたって、そういうことが書いてあったみたい」

「何階から飛び降りたんだろう？」

「さあ……」

4階から飛び降りたら死ぬるのだろうか。

飛び降り自殺をしようと思う人間にとっては少し頼りない高さに思えた。恐らく大丈夫だろう。

そう思いながら心のしこりが取れなかった。

帰り道、僕は洗濯バサミを拾った位置で上を見た。

4階だ、あの部屋だろうか。

この辺りで警察が現場検証をしている様子はない。

現場は通学路からは見えない中庭の方かもしれない。やっぱり無事だろう。

しかし気になる。そうこう考えてる間に、僕は413号室の前に立っていた。

崎野、表札にはそう書かれていた。

1年前は確か何も書かれていなかった。妙な緊張を共にしながらブザーをおした。

もし引越していたなら前の住人の知り合いだと言えはい。「はい」と明るい声が聞こえた。

「あら」

女性は意外な来客に驚いたのか、一瞬目を丸くし、次第に頬を緩ませた。

「いらつしゃい。遅かったわね」

中に入るよう促してくれた。やはり不用心だと思う。花柄のレース

のついた部屋着のような格好だった。

リビングの真ん中にはこたつがどうどうとしていた。

僕は促されるままこたつに入る。こたつの中は温かい。

「ココアでいいかしら？」

「まだココアがあつたんですか？」僕は思わず吹き出しそうになる。

「だから言ったでしょ。一人じゃもつたいないって」言ってるから歯を見せて笑った。左側にだけできるえくぼに、僕は見とれていた
崎野さんはコーヒーを飲んでいた。

「ココア嫌いなんですか？」と聞くと「ううん、コーヒーの方が好きだけ」と言う。

なるほど、ココアは減らないかもしれない。

そこで、僕の記憶はぷつりと切れた。

警察の呼びかける声で、僕は一度目を覚ました。

辺りは暗く、地面は冷たかった。いつの間に移動したのか、分からない。警察も驚いている様子だった。

「おい、大丈夫かい？」

はい、と答えようとしたものの声が出ない。身体が動かない。

「今、救急車を呼んでいるから」

そこで僕は身体が痛むのに気付いた。崎野さんはどうしたのだろう。そうして、そのまま眠りについた。

どうやら僕はあのマンションから飛び降りたらしい。
どこからか、そういう情報が耳に聞こえてきた。
自殺だとか、事件性はないだとか、どうして、だとか。

僕が聞きたいよ。

飛び降りた記憶も、殺された記憶も、自殺に悩んだ記憶も、僕には
なかった。

可愛い彼女はどうしているだろうか。

無責任なことに、家族よりも彼女が気になった。

そして、崎野さんに疑惑を抱く。

僕の、最後の記憶はそこなのだ。

ふと気付いた時、僕は魂だけの存在になっていた。

眠っている自分の傍に母親がいる。ベッドの隣のイスに座って僕ら
しきものを見おろしている。

姿形は僕と同じ、僕らしきもの。でも僕は母親の隣に立っていた。
そんな僕には気がつかず、また、涙一つ流さず、
ただ眠っている僕らしきものを見ていた。

これがいわゆる、幽霊というやつか。

僕は自分の死をあつさり受け入れた。

僕は崎野さんのところに行った。

崎野さんは413号室のこたつでコーヒーを飲んでいた。

「こんにちは」崎野さんは笑顔で言った。

「あなたが、僕を殺したんですか？」僕はあまり恨んではない様子だった。

ただ知りたかった。僕を殺した理由を。ここであつた出来事を。

「いいえ」言ってから崎野さんはコーヒーを飲む。

「こたつにはいつたら？ココアでいいかしら？」
にこりと笑う。左側のえくぼが浮かぶ。

「話して下さい。記憶がないんです。どうして僕は死んだんですか？」

僕の返事を聞くより早く、崎野さんはココアを作りはじめた。

僕は言われた通り、こたつの中に足を伸ばした。温かい…気がした。

「僕は死んだのですね」確認しておきたかった。

「ええ」崎野さんはコーヒーに視線を落とす。

「今の僕は幽霊なんですか？あなたには何故僕が見えるんですか？

あなたの知っていることを教えて下さい」

いままで冷静であつた頭が熱くなってきた。

知りたい。

その思いが強まる。

どうして今まで冷静に死を受け入れていたか、そのことがむしろおかしく感じた。

「キミが自殺をしたのはキミのせい。って言ったらいくらなんでも酷かな。言いかえると、達の悪い悪霊のせいかしら」

崎野さんは首を左に傾けて上目づかいに言った。うーん、と考えながら話している。

「キミは少し霊に好かれやすい体質だったから、私とその体質を変えてあげるって提案したの。その代わりに代償をいただくけどね」にこりと笑う。可愛らしいえくぼが浮かんだ。

「キミはその提案を断った。だからキミは霊のせいでひどくナーバスになって自殺という道を選んだ」

崎野さんは僕の方をまっすぐに見ていた。

そうですか、と納得できそうな気もした。

しかし、どこかで納得するなと叫ぶ僕がいる。

「いろいろ聞きたいことがあるんですが」僕は混乱していた。

「どうぞ」と崎野さんはにっこり笑う。

「まず、僕が霊に好かれやすい体質ってというのは、本当ですか？」

崎野さんは眉毛をよせて、ムツとした表情を作った。

「今の説明に嘘はないわ。信じる信じないはキミの勝手だけど、信じないなら説明するだけ馬鹿らしいから質問しないで」

慌てて「すみません」と僕は言った。「信じます。ただ色んなことが突然すぎて、うまく飲み込めなくて」

崎野さんは頷いた。「しょうがないわね、他は？」

「代償ってなんですか？」

「彼女と別れることよ」崎野さんは即答した。

「彼女？」僕は驚いた。

「どうして彼女がいることを、いえ、彼女のことを知っているんですか？」僕は訊いた。

崎野さんは少し黙ってから、「その辺の詳細は長くなるから省かせていただきたい」と変にかしこまって言った。

「彼女と別れたら、僕は自殺をしなかったんですか？」

「少なくとも、今回の自殺は免れたわ。でもね、人は早かれ遅かれ死ぬの。その時悔いのない決断をしたんだから、あまり気にしないことね」「コーヒーをすする。呑気な人だ。

「どうして僕は記憶がないんですか？」

「それは私が消したの。契約を結ばない場合はこのことを他言されないように記憶を消すの。契約成立の場合も、他言しないように約束させる」

「このマンションでもう一人、若い女性が自殺しましたよね。それも悪霊のせいですか？」あなたのせいですか？という皮肉もこめたつもりだったが。

「それは秘密」唇に指を当てウインクをして、それを流した。

「僕と出会ったのは偶然ですか？」

「出会いはいつも偶然よ」

「崎野さん、あなたはいつたい、何者なんですか？」

目が合った。崎野さんは僕の目をまっすぐ見る。

「あくま、かな」曲線を描いた唇がそれを告げた。

僕はこのまま成仏をしてした。

事の真相は知りたくもあり、また知りたくもなかった。

人は遅かれ早かれ死ぬのだ。

もし悪魔の取引が交渉しても、この先の人生苦しんだだけだろう。

なぜだろう。素直に死を受け入れられた。

崎野さんの笑顔を思い出した。

どちらかという天使のような、愛らしいえくぼを見せる温かな笑顔だった。

洗濯ばさみ（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます。どうぞいませ。

初めての友達（前書き）

（優美香編）

初めての友達

おそらく、産まれた時から、私は「笑わない子供」だった。

無表情を貫き通す子供は「こわい」と言われ、忌み嫌われていた。私は、自分から話しかけることもなく、もちろん他人を怖がらせるでもなく、ただひっそりと息をしているつもりだった。

一つ年下の妹は、私と違って上手に笑える。母さんも父さんも、そんな妹を愛していた。

露骨に私を避けるようなことはしなかったが、必然的に私との会話は盛り上がりず妹と笑いの花を咲かせることが多かった。団欒はいつも妹が中心で、感受性の豊かな母さんと妹は同じドラマや映画を見て泣いていた。

私には、それを見る意味すら分からなかった。

高校に入って、初めての友達ができた。

きっかけは美術の授業だった。高校の選択授業で美術を選んだのは、書道と音楽に比べて一番マシだったからだ。

特別絵を書くことが好きだというわけではない。ただ、勉強にはもう疲れていた。息抜きに落書きをする。いつの間にかノートや教科書のすみは落書きだらけになった。

優美香は私の絵を気に入ってくれた。

授業中に描いた絵を大袈裟に褒め、ノートの落書きまで見せる仲になった。

その日、優美香はいつも以上にもじもじしていた。

「もしよかつたら、私、小説書いてるんだけど」

優美香は少し恥ずかしそうに言う。

「その、小説の主人公の絵を書いてほしいの」

優美香の小さな口が遠慮がちに言葉を放つ。赤ちゃんみたいな大きく潤んだ瞳が私を上目づかいで見ると。

男だつたらいちころだろうな、と私は思う。優美香の容姿は整っている。

「いいよ、あんなのでよければ」私は言った。

「よかつたあ」優美香は大きな目を線にまで細めて笑った。

あんなの、というのは、以前、夏目漱石の小説の登場人物を描いたことがあった。

私はKと呼ばれている少年が特に好きで、小説の登場人物を描いたのはこれが初めてだった。

それを見せた時、優美香は小動物のように愛らしい笑顔をした。「素敵」と。

他のキャラクターも描いてと頼まれ、その小説に出てきた人物をほとんど描いた。

全て私の頭の中の容姿にすぎず、想像であり理想の姿だったのだが、優美香はそれをえらく気に入ってくれた。あまりに喜んでくれるものだから、いくつかをプレゼントした。

描いてみたいと思った。

優美香の想像する世界に出てくる人物を。

優美香と話しているうちに、似ているところをいくつか発見した。それは、例えば周囲の顔色を気にするところであったり、そのくせ流行には鈍いところであったり。

しかし私達には致命的な違いがある、と私は感じていた。

私には笑顔を作れない。

優美香のように、人に安らぎを与えるような笑顔を、私は持っていない。

帰り道、「おねいちゃん」と後ろから呼びかける声があった。妹だ。振り返ると妹は手を振ってから、私の方に走ってきた。頬を赤らめて、息を整えながら悪戯っぽく笑う。「へへ、追いついた」

心臓がずきんと揺れた。妹の顔、特に笑っている顔を見るといつもこうなる。

胸が痛いのだ。可愛いく笑う妹が時々堪らなく憎くなる。

私は平静を装う。「今帰り？」声が震えてないか不安だった。

「あ、うん。そうだ。山岸くん！はやく！」

妹の視線の先には男の子がいた。「紹介するね、山岸くん、今付き合って1カ月なんだ」

妹は頬を赤らめたまま幸せそうに笑った。

そこに邪気はない。それでも、胸の痛みが増したのは確かだ。

おねえちゃんは無愛想だから友達がいらないんだよ。昔、妹がそんなことを言った。

今は空から声が聞こえる。
おねいちゃんは笑わないから彼氏もできないんだよ。

私は足早に帰った。

胸の痛みが消えるまでベッドで横になった。

大丈夫、慣れてる。慣れてるよ。こんなの、いつものこと。

気持ちが悪く落ちて着いてから机に向かった。夕食は抜いた。食べられないわけではないが、食べたいとも思わなかった。

机に座って宿題をした。それが終わってから優美香の書いた小説を手取る。

ノートにそれは書かれていて、ぱらぱらとめくる限りそれほど長い文章は書かれていない。

私は深呼吸をして、それを読み始めた。

一人の、悪魔の話だった。

悪魔は少年だった。人間の女の子に恋をするけれど、自分は悪魔だからそばに寄ったら彼女を不幸にしてしまう。

自分が天使だったら、どれだけよかつただろうか。少年は自分の性を恨み、嘆いた。

とても悲しい物語だった。

私は悪魔の少年を描いた。気が小さく優しそうな、憂いを帯びた顔、色、姿、形、目、視線。

水をイメージした。少年は水を纏っている。それは涙なのかもしれない。

ない。

私はイメージした少年の絵を何枚も描いた。

次の日、優美香にそれを見せると彼女はとても喜んでくれた。

「何かお礼しなくちゃ」後ろに明るい花が見えるような、満面の笑み。目はまんまるとしてきらきら光っていた。

「うっん、喜んでもらえて嬉しい」私は素直に喜んだ。

自分の書いた絵で、こんなに素敵な笑顔を見られる。

それは誇らしい気持ちだった。

すると、優美香はじつとこちらを見てきた。

「ん？なに？」

丸くしていた目を細めて、にっこり笑う。

「笑顔、初めて見た。かわいい」

驚いた。笑ってる？私が？

面白い、楽しい、といくら思っても顔だけはどうしても笑わなかった私が。

帰ってから、私は鏡の前で笑ってみた。

でもそれは瞼の重い仏像のような顔で、とても笑っているとは言い難いものだった。

優美香は何度か「あ、笑ってる」と教えてくれた。

それは決まって、優美香に自分の描いた絵を見せた時だった。

その時だけ私は笑うことができた。

確かに顔の一部が、どうしてもいつもは動かない一部が、その時だけ柔らかくなるような、感触もあった。

優美香は高校3年生になる春、転校した。

別れ際にこう言った。

「いつまでも絵を書くって、約束して」

私は頷いた。

小指を絡ませて、強く誓った。

あれから10年経った今も、私が笑顔を作れるのは決まった一時だけ。

「自分の描いた絵で相手の笑顔を見た時」その時だけ、私の顔は緩くなった。

優美香は私に笑顔を作る力をくれた。忘れられない初めての友達。

彼氏が、ちょっと恥ずかしかったけど、笑った時の私の顔を鏡で見せてくれたことがあった。

それは、悪くない笑顔だった。

初めての友達（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます。

浮遊靈(前書き)

〔 崎野編 〕

浮遊靈VS崎野

浮遊霊

少年が成仏した次の日、浮遊霊が崎野の部屋のこたつにもぐり込んできた。

「ねえ、なんで嘘ついたの？」浮遊霊が訊ねる。

「少年のこと？」崎野は聞き返す。浮遊霊の前にはココア、崎野の前にはコーヒー、それぞれ湯気を立たせていた。

「私、まだ何もしてない」浮遊霊は俯きながら言う。

「そうね」

何も説明してくれない崎野に、浮遊霊は意地悪を言ってみた。

「みんな、あなたが死ぬのを待っている」

崎野はカラカラ笑う。

「うん、私、みんなの邪魔しかしてないから」

浮遊霊は腐ったものをつまみあげるように顔をしかめて言う。

「知ってる？ この世界には精神科というところがあるのよ。そこに受診するといいわ」

「どうして？」

「あなたはちよつと、おかしい」浮遊霊は顔を歪めたまま、また俯く。

それを言っちゃあ、と崎野は眉を寄せる。

「幽霊が見えてる時点で幻覚と見なされるわ。あなたに精神科を勧められるとはね〜」

崎野は呑気な口調だった。

浮遊霊は少年を呪い殺すよう、ある人間に命じられていた。呪い殺した時点で、浮遊霊は悪霊となる。悪霊となる前に、殺すはずの少年が死んでしまった。

「嘘はついてないわ」崎野は言う。「少年は幽霊に殺された。あなたじゃない、立派な悪霊にね」

浮遊霊は顔を上げる。崎野の目はまっすぐに浮遊霊を見ていた。口元は笑っている。

「私の友達」崎野が言う。

「あなた…」浮遊霊は怯えた。幽霊になって気付くこと。絶対的な力の差がここには存在する。強い霊の前では浮遊霊など、少々人間に力をもらっていても、何もできやしない。

「悪霊と、友達なの？」

「見えないでしょ？今もあなたの後ろにいるわよ」崎野は浮遊霊の後ろの宙を見てウインクした。

浮遊霊は後ろを向く。しかし何も見えない。

浮遊霊はすでにいくつかの地縛霊や悪霊と出会っていた。姿が見えない時もある。でも、その時に必ず感じる悪寒が、震えが、今は感じない。

「敵意がないと、殺気は出さないわ」見据えたように崎野が言う。

しばらく無言になった。

浮遊霊は崎野がウインクした先を恐る恐る見ようとしては止めてを繰り返し、目が泳いでいる。

「少年も気の毒だわ」崎野の声に浮遊霊は我を取り戻した。

「彼女と別れたら、死ぬこともなかったのに」崎野はため息をついた。

「もし、少年が彼女と別れることを選んだら、私がけされていた？」

浮遊霊は後ろの存在を恐れながら言う。

崎野は目を丸くして、そして笑った。

「どうだろうね」

崎野の笑顔を見て、浮遊霊は少し安堵を取り戻す。

どうしてこの人はこんなに人を安心させるのだろうか。

だから、と崎野は続けた。

「早く成仏してしまいなさい。あなたも」

「私はどうせ、天国なんて行けやしない」浮遊霊は俯く。

「それでも行きなさい。悪霊に消されるよりはマシでしょ」

浮遊霊は後ろの存在を思い出し、少しいじけた。

「武力行使じゃん」

崎野は声をだして笑った。「一番きくでしょ」

そうして浮遊霊は成仏した。少年が成仏した次の日に。

「私以外にもう一人いるわ。みんなの邪魔しかしていない、早く死んでほしいと思われている子が」

浮遊霊が成仏した後に、ぽつりと崎野が零した。
悪霊は、それを聞いていた。

悪霊ゼシ(前書き)

崎野編

悪霊VS悪魔

悪霊ゼシ

崎野の部屋は暖色で囲まれていて、悪霊のゼシにしては居心地の悪い場所だった。

それでもゼシが、崎野のもとを訪れるのは、この部屋と同じ温かな気持ちの原因だった。

そして、ゼシがこの部屋を訪れるのはほとんどが夜で、崎野のいない時間帯だった。

崎野は夜、人間界の仕事に出ている。ゼシはその間、崎野の部屋を守っていた。

「悪霊がこんなところで何してんのさ」

ある日、低級の悪魔がからかいにきた。

悪魔はきよるきよる辺りを見回し、悪趣味だと言った。

同感だ。ゼシは答えた。

「あんた変わってるね。普通悪魔が来たら、嫌がるもんじゃないの？」

悪霊は、天使も悪魔も嫌う。

霊とは、ただ現世に縛られ、精神の世界を彷徨う。生きている人間を殺すと悪霊になれるわけだ。

そんな悪霊に奴らはことごとくちょっかいを出す。

悪霊に限らず、浮幽霊も、地縛霊も、人間も、悪魔や天使からは逃げるものだ。

いつのまにか、生きている人間は天使にすぎるところようになっていくが、それを見て、悪霊達は笑う。天使が何をしているのか、悪魔が何をしているのか。

それを知らない奴らが哀れで、また悪霊達もかつてそれであったことを思うと、笑うしかないのだ。

生きている哀れさに。

ゼシは悪魔のセリフを聞き、ふと我を笑った。確かに、悪魔に話をする必要性などない。

低級の悪魔は、悪霊の笑みを見逃さなかった。

「悪霊と仲良くなりたいたいだ。少し話をしないか？」

始めは腰を低くする。とてもとても低くする。

しかしそいつの腰は、低くしてやっと自分より少し下の位置になる。そいつが腰を伸ばしたら、あっという間に見下ろされてしまう。それが悪魔だ。

だが、ゼシは悪魔の提案に賛成した。

「朝の4時までだ」

悪魔は驚き、そして喜び、ゼシのあれこれを聞きだした。

さあ、どこまで知っている？

ゼシは悪魔の問いに答え、時にはぐらかし、相手の情報を聞きだした。

この悪魔は、悪霊のことを、崎野のことを、どこまで知っている？

「俺が鎖を解いてやるよ」悪魔は言った。

「奴がつけた鎖、おまえをしばる鎖さ。するとおまえは自由になれる」

悪魔は続けた。

「あんた、知ってるだろ？この住人がどれだけ邪魔な存在か」

サーモンピンクのカーテンと甘いココアが似合うこの住人。

しかしどちらでも大嫌いな、この部屋の変わった住人。

「あんたは強い。俺程度の力じゃあんたに叶わない。すぐにでも追い出せたはずだ。でもしなかった。なぜだ？」

ゼシは答えない。それが悪魔の本性を聞きだす一番の得策だと思ったから。

「俺はあんたの鎖を解くことができる。それ以上は、なにもできない。あんたはもう、人間ではない。いつでも無に変えられる。嫌になれば変えればいい。あんたらは誰よりも自由だ。なのに鎖がそれをゆるさない。ここの住人はしてくれないんだろ？なら俺がして

やる。あんたの鎖を、外してやるよ」

ゼシは黙って聞いていた。笑いを堪えた。

鎖。いつたい何の話だ。

誰かへの恨み？世界への執着？全てへの憎しみ？いつたい何が鎖だ。

おまえは何も分かってない。低級の悪魔よ。

ゼシは心の中で悪魔を憐れんだ。

悪魔はゼシのつれない反応に肩を上げ、諦める素振りをした。

「自由はもう、いらぬのかい？」

悪魔は言った。

ゼシはとうとう笑った。溜まっていた笑いの息を吹きだした。

「あんたの言う鎖がなんのことだか分からないが」

悪魔を見てゼシは言う。「俺は自由だ」と。

「なんだって!？」悪魔は驚いた仕草をした。芝居か否か。芝居にしては下手過ぎる。

「そんな鎖を巻き付けて、キミは自由なのかい？」

悪魔はにやりと笑う。

「じゃあキミは、恋ができるのかい？」

ゼシは沈黙した。

恋？何かが頭を過ぎた。それは早すぎて、ゼシには何か分からなかった。

時間は刻々すぎていく。

沈黙もまた、刻々と過ぎていく。

しかしゼシは時間を忘れない。約束の時間が近づくとココアを入れた。

「さあ、時間だ。出ていくがいい」

悪魔は頷いた。しかし「最後に一つだけ」と付け加えた。

契約は守る。しかし約束は破る。それが悪魔だ。かわいそうなやつ。

「そうか。口での約束は契約には入らないのか」

4時を一秒過ぎた時、悪魔は消えた。

ゼシが悪魔を消滅させる術を使ったのだ。ゼシがする必要もない。玄関の外には崎野もいた。

この程度の悪魔は崎野の敵ではない。崎野の方が労力も少なく悪魔を消滅できるだろう。

しかしゼシはこの仕事を引き受けた。

そして、すぐに崎野の家を出た。おそらく悪魔臭いだろう。

それに、悪魔を家に入れた罪悪感からか、崎野に合わす顔がなかった。

悪魔が言っていた鎖。それは生きていた時の満たされなかつた精神恨み。怒り。悲しみ。心配。生き場のない様々な思いと疑問。悪魔や天使はそれを外すことができる。

どちらに外してもらっても構わない。そういう意味では霊にとって悪魔も天使も同じだ。

そして、天使も悪魔もかならず何か条件を付ける。どちらの条件が自分にあっているか、その違いだけだ。条件を満たした後、来世への道を作る。

鎖を外した霊は自由になり、好きなところに行く。しかし、鎖がなくなると、現世というのはあまりにも暇なのだ。必ずそれに気付く。そして霊は新たにできた道へと進む。

これのいったい何が自由だ。
多くの悪霊が、地縛霊が、浮幽霊が、感じている。そして、時に憧れる。

新しいものが輝かしく見える瞬間。

天使も悪魔も、霊たちを見ては来世へ送ろうとする。その憧れを増

幅させて。

それが彼らの仕事の一つでもある。

「ゼシ」 崎野はもう遠くに行ったゼシに話しかけた。

「さっきの悪魔は低級なんかじゃないわ」

崎野はココアを口にした。

悪魔はココアとともに、崎野の体内に入った。

「まずいココア」

崎野は、まだ熱いココアを一気にのみつくし、言葉だけを零した。

窓を開け、ゼシに告げた。

「あなたの鎖は私が解くわ。条件は一つ。ある人間を、殺すこと」

3日後、ゼシはそれを実行した。

ゼシの鎖はするする取れて浮かび、やがて道が表れた。

道への好奇心がゼシを支配する。

しかし、ゼシは崎野のそばにいた。

自由とは、選択すること。

進むも止まるも自分次第。

母の気持ち（前書き）

（優美香編）

優美香の過去

母の気持ち

「ただいま」

その明るい声が聞こえると、たとえ居眠りの中においても目が覚めてしまう。

しかし、そこに不快はない。

「おかえり」

私は優美香の声を聞いて、負けないような明るい声で返答するが、とても勝てやしない。

「ママ、今日はいいことがあったの」

そう言って優美香は学校の友達の話の話を聞かせてくれる。

こんな日があるなんて、思いもしなかった。

優美香の明るい声を聞くと、毎日毎日それを感じた。

優美香は小さい頃から見えないものが見える子供だった。

二、三度医者にも連れていった。検査はいつも異常なし。

そして「子供の時によくあること」「子供なりの遊びでしょう」と

言われ終わってしまう。

優美香の笑顔はいつも壁や宙に向かっていていた。

3歳くらいまでは同じ笑顔を私にもくれていたが、彼女が成長するにつれて、無表情にちかい、

しかしどこか怒りを表している顔を私に向けていた。

主人には優美香は笑顔を見せる。主人は出張が多いためたまにしか帰って来ない。

また、カウンセラーという仕事柄のせいか、優美香を受け入れていた。

娘、というより、クライアントと考えているのかもしれない。

病院に行き、優美香の言葉を信じなかったのが原因だろうか。

私は後悔し、でもどうしようもなくて、私自身もノイローゼになりかけた。

そんな時、優美香が話しかけてくれた。

「ママ、ユミカの友達が、ママと話したいって」

私は優美香を受け入れかけていた。

きつと見えている、この子に見えている非科学的なもの。

「ママも、話がしたいな。できるかな？」

優美香は目をパチクリさせて「うん」と満面の笑みを見せてくれた。

その時の出来事は不思議なものだった。

優美香の隣に、大人の女性が見えた。

「あなたは…？」

「先ほど紹介をいただきました、優美香さんの友達です」

普通の人間に見えた。20代の半ばだろうか。

身ぶりや雰囲気から年下には見えにくい、容姿が美しい。

「あ、どうぞ。おかけください」

優美香にそんな友達がいたなんて、私は慌てながら席を勧め、「何かお茶を」と用意しかけていたが、

「おかまいなく」と女性は微笑み、席に座った。

「え…と」私は明らかに戸惑っていたが、女性が話を進めてくれた。

「はい、優美香さんには、人間には見えないモノが見えています」

いきなり核心に触れた。

それでいて、女性の、余裕のある態度。

怪しさや不安、そして一水の希望が一緒になって襲ってきた。

女性は話を続けた。

「そのため、普通の人間とはなかなかお付き合いが難しい状態にあります。私はそのような人のために何かお手伝いをと思い、今回優美香さんとお友達にならせていただきました」

丁寧な口調が続く。怪しい商売を思い浮かべる。

「あなたは…？」始めに聞くべき質問を今更ながらにしてみました。

「あ、すみません」女性は目を見開き慌てて小さな鞆から名刺を取り出した。

「あの、仕事用のもので申し訳ないですが、これは仕事の名刺で、今回の話とは関係ありません。私も、優美香さんと同じように、見えないモノが見えるのです。そう言った人達のために個人で人助けをしています」

名刺には聞いたことのない会社名に営業担当と書かれていた。

安西由紀子と名前が書かれており、その隣に会社の電話番号と本人の電話番号が書かれていた。

まじまじと名刺を見ている私に、安西由紀子は照れくさそうに笑う。

「人助けというか、ただの自己満足なんです」

その仕草と包み込むような柔らかな声で、胡散臭い名刺より安西由紀子の人間性を信用した。

話を聞こうと思えた。

何より、今の優美香を受け入れた時点で、優美香の将来に不安が残る。

解決策を提案してくれたのは、目の前の女性が初めてだった。

「それで、いったいどうすればいいのでしょうか…」

安西由紀子は頷いた後に、方法はいくつもあります、と切り出した。

「まず一つ目、優美香さんの視界を通常の人間と同じものしか見えないようにする。成功確率は60%、失敗すると失明します」

私は息を飲んだ。そんな恐ろしい方法誰が指示するのだろうか。

「もう一つは、優美香さんの視界はそのままにして、周りにいる見えないモノを遠ざけます。これは徐霊とよばれるものであり、成功確率は99%です。彼女を狂わせてしまいうリスクなどはありませんが、新たなモノが近寄り、彼女を誘惑する恐れがあります。また、これは優美香さんに限ったのですが、」

少し間を置く。

私は安西由紀子の言葉を取り逃がすまいと、必死だった。

「優美香さんの場合、見えないモノを友達だと思っています。そのため、これらを取りはずすと友達を失ったという喪失感が生まれる可能性は多いにあります」

私は頷いた。

優美香が宙に笑顔を向けている姿を思い出す。

それがなくなると、きつと里親を失くした子猫のように、彼女は不安で覆われるのではないだろうか。

それを私がつけとめられるだろうか。

優美香の見えない存在を受け入れかけていた時だったからこそ、躊躇した選択肢だった。

「他には、どのような…」私の言葉は最後まで続かない。

こんなに提案をくれたのは初めてだった。

精神科に連れていけば恐らく病名が与えられる。

しかし、それは優美香の人生に大きくのしかかる差別の壁でもあった。

これだけの提案でも大いにありがたかった。

それなのに、さらにとというのは、欲張りな自分を感じさせた。

「後は、お母様の協力が必要となります」

安西由紀子は私の顔を真正面から見つめた。

威圧感のある、しかし信頼がおけるような、

ばらばらの、二つの感情が入り混じる、混ざらせる瞳。

「守護霊、と言えばわかりやすいでしょうか。それを彼女につけ、悪いものは近寄らないように仕向けます。その場合今の状況とあま

り変わりませんので、お母様の理解が必要です。将来、彼女が人の道を外さないためにも、見えないものが見えていること。それは人から嫌われるということ。そのため、人前では言わないこと。そのようなことを彼女に伝えるべきでしょう」

私は昨晚のことを思い出した。

もうすぐ小学生になるというのに友達ができない不安。

「あの子達はいいの。つまらないから。友達ならこの家にいっぱいいるし」

ぞくぞくした。この家に優美香の言う友達がいっぱいいる。

「もし悪いものがいれば、徐霊をお願いします。その後に守護霊を付けて下さい」

安西由紀子は、それでいいですか？と訊ねるような、あるいは心配そうな瞳で私を見つめた。

「お母様」

安西由紀子は、まるで子供をあやすような全てを包み込む声をして
いる。

私はそれに包まれていた。安堵。その気持ちよさ。それに酔いしれる。

「見えないものと一緒に暮らす恐ろしさは、お母様が一番ご存知ではないでしょうか。もう、そんなもの忘れたいと、思いませんか？」

私は驚いた。

自分は見えないものと暮らす覚悟をしていた。
しかしそれを避ける光があるという提案。

まだ、方法があるのか。

見えないものがなくなる方法があるのか。

「少し強引で言いにくかったのですが、一度、優美香さんの記憶を消します。所謂、記憶喪失のようなものです。しかしお母様の存在だけは覚えていて、そんな状態です。お母様とまた一から歩むという方法です。」

「記憶喪失」という言葉に若干の恐ろしさはあったが、ない方がいい記憶が圧倒的に多かった。これから積み上げればいい。優美香はまだ、5歳だ。

「記憶を消す作業を行うと一時的に優美香さんは眠りにつきます。その間にこの家全ての徐霊を行います。最後に守護霊を置きます。それはどんな霊も近づけないものです。優美香さんは体質上、霊が近寄りやすいため、守護霊は置いておいた方がいいと思うのですが、いかがですか？」

私は何の迷いもなかった。

これでまた、あの子と歩んでいける。

笑い合うことができる。全てを忘れて。

安堵を受けてから、瞳にたまっていた涙が頬を伝った。

「お願いします」涙はつぎつぎに流れていった。

お金はいくらでも払う。そんな気持ちに支配されていた。

「はい」安西は優しい微笑みで受け入れ、机に紙を置いた。

契約書と書かれていた。

「どうしても私がそんなことをできるのか、これは普通の人間ではできません」

安西は優しい口調のまま続けた。

「私は悪魔と呼ばれる存在です。でもあなたから何かを奪ったりはしません。これは一種の自己満足ですから」

契約書はまだ白紙だった。

そこに安西は次のように書いていった。

- 1、悪魔について、今日の出来事について、優美香さんを含め一切他言しない。
- 2、この家にいるモノを追い払い、またあなたの子供である優美香さんに見えないモノを寄せ付けないよう処置する。
- 3、優美香さんの記憶はあなたの存在以外全て消える

そこまで書いた後に、「対価が、どうしても必要なんです」と安西は言った。

「優美香が幸せになるなら、なんでもします」「こんな母親らしい言葉を、私は初めて口にしたかもしれない。

「では、こうしましょう」

4、二年に一度学校を変える。同じ学校には通わない。

「え？」私は突飛な考案に驚いた。「これは?…」

安西は言う。

「優美香さんは、色々な人に出会った方がいいでしょう。もともと彼女は目がいいのです。見えないものが見えるくらいなのです。人間を見る目もあります。彼女がいいと思える人間にたくさん出会しましょう。大丈夫。人の縁は簡単には消えません」

私は契約書にサインをし、安西は「商談成立」と言い姿を消した。安西が自分を悪魔と名乗っても、契約書を出しても、それにサインしても、安西は人間にしか見えなかった。しかし目の前にいたはずの女性が消えた時、初めて恐ろしさを感じた。

優美香…

私は急いで優美香のところへ行つた。

優美香はベッドで眠っていた。

「優美香！！！！」

何度も叫んだ。

私はいつの間にか悪魔と契約してしまったのだ。

「優美香！！！！」

「優美香！！！目を開けて！！！」

しばらくして優美香はゆっくり瞼を上げた。

「お母さん…？」

私は優美香を抱きしめた。涙がとまらない。

「お母さん…ユミカ…」

「うんうん、大丈夫。お母さんがいつも一緒にいるからね」

優美香はにっこり笑った。悪魔がくれた天使の笑顔だった。

神様の世界（前書き）

今回の内容がわかりやすくなるようにのつながりです。

神様の世界

神様はいつも美しく、清らかで、
周りには天使様がたくさんいるの。

私達は神様のお決まりになさったことを必ず守るわ。
そうすれば人は、幸せになれるでしょう。

少女の祈りが教会の静けさに木霊する。
その祈りを聞いた神様は、上々から階下を見下ろしていた。

「僕はただ、愛と美を食べるだけなのにね」
神様はとてもしまらなさそうに世界を見下ろした。

その台詞にあきあきした天使達は、それでも神様のそばを離れな
かった。
天使にとって、神様のそばにいられるということは何よりも名誉な
ことだった。

「あれではまずそうで、とても食べられそうにないな」
天使達はくすくす笑っている。
生きた人間など汚すぎて神様は食べられない。

引き裂けば引き裂くほど美しくなる愛。

戦の中で強く輝かせる精神。

眠りの中で見る人が創造した空想。

自らを犠牲にして大衆に一時的な幸せを与えた人間の魂。

「さて、君達。あの少女に、美しい歌声をあげよう。誰よりも美しい歌声だ。祈りにくるのに、いつもあの声では、まるで僕が汚らわしいみたいだろう」

「はい、主様」天使が3人ほど下界に降り、祈りの少女に美しい声を渡した。

「こういつことをなさるから、人間はさらに我々を誤解されるのです」

まだ神様のそばに仕えて間もない天使が言う。周りに一瞬の緊張が走り、その一瞬とともに爆発音が響いた。

「つまらん」

神様はそう言つて、天使を塵よりも小さな個体にして地上に捨てた。

「僕はただ、美しいものが欲しいだけだよ」
神様は別の場所へと移動した。

ついでいく天使達と、その場に留まる天使達。
発言した天使がいた場所を、留まった天使達は凝視した。

「いつか言うのではないかと、危惧しておりました」
留まった天使達のうちの一人が口にする。

「わたくしは、彼女とともに下に降ります」
留まった天使達は口々にいった。「私毛」

そうして塵よりも小さくなった天使を追つて、下界へと天使達は羽ばたいた。

小さくなった天使を見つけ、皆が少しずつ力を与えた。

下界から力を吸収しては与え、吸収しては与え。

その力とは、大地から自然治癒と、悪魔や人間の魂だった。

そうして小さくなった天使は成長していった。

少しずつ、少しずつ。

「ほう、ここに随分と美しい子がいるな」

神様は天使が減ったことに気付きながら、気にする様子もなく新たな発見を楽しむ。

ついていった天使達も、気にすることなく神様のそばを離れない。

一人、また一人と天使が近づいてくる。

神様は天使とともに新たな愛を見学していた。

「彼女を天使にしようか。悪いね。君達ライバルがまた増えてしま
いそうだよ」

天使はいつも笑顔で答える。

「主様のためなら」

彼女達には信仰心しかない。いや、ないはずだった。

悪魔と崎野の契約

「どつでもいいけどさ」

悪魔はゆるやかに舞う髪を手ではらい、威勢のある声を崎野にぶつけた。

「ちよつとくらい詫びてよ。私の彼氏だったんだよ！」

元気な悪魔はきちんと玄関から入ってきた。

崎野もその礼儀にお応えし、戸を通しこたつのある部屋まで案内した。

終始無言だった。

悪魔はこたつに入ることにはせず、代わりにその近くにあるソファに堂々と腰をかけ、やっと口を開いた。

崎野は少し間を置いた。

悪魔が堂々と扉から入ってくるのは珍しい。

こつそり覗かれることならよくあるけれど。

もちろん、彼女は崎野の被害者とも考えられるため、崎野にたいし

て言いたいこともあるだろう。

しかしここは絶対力主義。

この世界に置いて、崎野の威厳を知らないのは人間と、浮幽霊になりたてものくらいだ。

「そうね。悪かったわ」

崎野は素直に詫びた。これで気がすむのだろうか。

「軽いわよ！ちゃんと詫びて！私の心を踏みにじって、どういこうつもり！あんたにそんな資格あるの！？」

崎野はまた間を置く。

誰にも存在を否定する権利はない。

あの少年は確かに、武力行使で殺し、早々に成仏させた。悪魔に会わせる前に。

しかし、

「彼が文句を言いに来るなら話は別だけど、あなたに対しては今謝った以上の被害を与えたつもりはないわ」崎野は騒然とした態度を悪魔に見せる。

悪魔は鋭い目つきで崎野を見る。
穏やかにしていれば可愛らしいであろう顔面すべてで、崎野を睨んでいた。

崎野は悪魔に背を向け、コーヒーを入れに行く。
悪魔の前にも置いた。「どうぞ」

「いない」

悪魔は短く答えた。

ブルーマウンテンの香りが部屋中に漂う。
大地と木々の声が雫となって身体に入る。崎野はそれが好きだった。
壮大な木々は涙みを覆い、幻想でない現実は苦い。
この香りは誰の脳をも刺激する。悪魔もまたしかり。

全身を細かくふるわせ、大粒の涙を落した。

「私が、人間と、恋をしてはいけないの？」

崎野は黙っていた。

「私は、彼を、陥れるつもりで付き合っただんじやないのよ。ただ…」

声はあらゆる水や空気に妨害され、うまく出ていなかった。崎野を睨んでいた顔が、涙でおおわれていた。

「ただ、彼が好きだった」
声を出してないた。

例えこれが嘘でも、本当でも、いままで誰にも言えなかったのだから。

誰かに言いたかった。その思いが崎野に届いた。

部屋はしばらく、悪魔の泣き声だけが響いていた。
それが止む頃、ようやく崎野は口を開いた。

「悪魔は、残念ながら人間を陥れることしか認められていないわ。
そうでないと神様がお怒りになるもの」

まだ、のどのあたりで呼吸をしている悪魔はそれでも、崎野の目を見つめ、

「所詮、悪魔も、神様の下」と、恨みをこめて言った。

「当然。悪魔が何さまだと思ったの？」崎野は平然とする。

「神様がなに様なのよ。大嫌い……」

憤慨する悪魔をみて、崎野はすこし笑ってしまった。
正直に嫌いと言えるのが悪魔と人間の権限だ。

「あんたはどうして、天使のくせに。神様に従わない？」

悪魔はその問いの本質よりも、ただの、やりきれない思いを崎野にぶつけていた。

やつあたりのような、込み上げた思いを。

普通、悪魔は崎野を恐れている。天使でさえ恐れている。

崎野は、やろうと思えば誰だって吸収できるし、だれだって成仏させられる。

その気になればどんな契約も結ばせる。崎野なら、拒まれることはほとんどない。

神様は直接悪魔を攻撃したりしないが、天使は悪魔に攻撃する。

久しぶりの質問に崎野は懐かしみを感じながら言った。

「それはね」

もちろん過去と同じ解答を。

「あなたのココロと同じ理由」

にっこりと、崎野が笑う。

それは、本当に、怒りくるう悪魔の前でも、天使の笑顔だった。

「私を消して」

ぽつりと、悪魔が言う。

そういう悪魔は何人も見てきた。

多くの場合、崎野は悪魔の望み通り吸収する。

しかし、今回は、別の方法を提案した。

「契約をしてあげるわ。来世の彼と、付き合いあえるかもしれない方法を」

契約の条件は、絶対服従。

「もう、消えてしまいたいのには」悪魔が、諦めの笑みと一緒に言葉をこぼす。

「もう少し、生きてみなさい」崎野が契約書を渡す。

悪魔はそこにサインをした。

優美香の正体

優美香が高校3年冬、大学進学も無事決まったころ、父が珍しく帰ってきて「お祝いに」と家族旅行を提案した。

そこで全員死んだ。

殺人事件だった。

新聞には大きく取り上げられていた。

幸せな一家に現れた突然の不幸。

「悪魔だ」と、とある新興宗教の役員がそれを理由に実行したという。

「かわいそう」

「こつこつやつがいるから」

「頭が狂ってる」など様々な批判の声が世間に広がる。

しかし、それは真実だった。

「かわいそうに」崎野は新聞を見て、言った。

その言葉は殺された家族にではなく、逮捕された宗教の役員に対してだった。

「新興宗教って意外と靈感強いよね」

そして、こたつに座っている優美香を見た。

「それであなた、ここに来たのね」

優美香は小さく頷き「契約終了」と呟いた。

「お疲れ様」

崎野は特にねぎらいの気持ちなど込めず、礼義的に言った。

その契約とは、悪魔が本物の優美香の母親とした契約のこと。母親が死んでも契約は続行だが、二年間同じところに留まった場合契約は終わり、母親の大好きな「優美香」のふりも終わる。

「で、どうしたいの？」

崎野は、この悪魔を追い払いたかった。

「あなたほどの力があれば、今の神様ころせるんでしょう」

優美香は口元だけで笑った。

「そうね。でも」

崎野の方を見る。

「あなたに邪魔されたら難しい」

崎野はあきれたような溜め息を大きくつく。

「邪魔しないから、早くしてらっしゃいな」

優美香はまだ崎野を凝視していた。

「あなた、とても強くなつたのね」優美香は淡々と言う。

「そういうあなたも、随分素敵な人間の魂をいただいたものね」淡々と崎野は言い返した。

優美香はまだこたつから離れない。

仕方がないのでコーヒーを入れに立った。

「それでもないわ」崎野が席を離れた時、優美香がぽつりと言う。

それでも崎野はその言葉を逃がさない。

コーヒーは二人分入れ、戻ってきた崎野は「どうぞ」と優美香にすすめた。

優美香は少し飲む。

「砂糖も欲しいわ」

崎野は目を瞑って香りを楽しみながら

「美味しいコーヒーなんだから、ブラックで飲みなさい」といった。

この家に砂糖はない。

あるのはココアだけ。

「この、人間の優美香さんは、とても強い」

そう切り出した優美香の話を、崎野は黙って聞いた。

「私がいるのに、まだいるの。いつまでも私に食われない。力も
うすでないのに、意識や思いがとても強い」

ブラックのコーヒーをまた少し飲む。

崎野の顔色をうかがいながら、優美香は話を続けた。

「邪魔なの」優美香は言う。

「これは、私の失敗だった。神様の子だから、力が強いことは分かっていたわ。でも」

優美香はお腹のあたりをさすりながら続ける。

「彼女の存在がある限り、私は神様を殺せない」

ようやく崎野は口を挟む。

「それは嘘ね」

いくら意識や思いが強くて、神様は殺せる。

もともと優美香は、次の神様になる予定の女の子だったのだから。

崎野の容赦ない口調にも優美香は顔色ひとつ変えなかった。

「あなたはやっぱり邪魔だわ」

そして続ける。

「どうして彼を殺したの」

彼、と言われ、それは悪魔に人気のある人間を思い出した。

「彼、ね〜。人気者ね〜。悪魔の媚薬でも持つてるのかしら？」

「とぼけないで」

間入れず優美香が言う。それでも口調は変わらない。暗黒の中のアルト。何の感情もこもっていない声。

「優美香が神様の子であるように、彼もまた悪魔の子でしょう」

「でも彼は人間であることを望んでいたし、悪魔の記憶は全てなくなっていた。何より、彼は自ら望んで成仏をした。私のせいじゃないわ」

崎野はまた目を瞑る。できれば、優美香を追い出したかった。

「どうせ、食べるつもりだったんでしょ」そう言ってから崎野はちらと優美香を見た。

「いいえ。この人間の優美香と契約を結ぶために使うつもりだった。優美香は崎野の思いを知っている。知っててまだ居座り続ける。」

「同じことじゃない。どうせ優美香の力と彼の力を吸収できる契約を結ぶのでしょ」

崎野は言ってから席を立った。

二敗目のコーヒーと、ココアを入れた。

「契約をしてほしいの」

ココアの香りに反応し、優美香は崎野に聞こえる声で話した。

「却下」崎野はコーヒーとココアをもってこたつに入る。そうして優美香を凝視した。

「嫌われたものね」優美香は嘘の表情を作った。

人間ならだれでも同情しそうな、弱く守ってあげたくなるような、あの、弱いけど頑張るといふ精神のこめられた表情。

「当たり前でしょう。さつさと神様を殺しにいきなさい」
しかし崎野は動じない。

優美香とここで戦ったら、結果は五分だ。
お互い、まだ戦いたくない。
神様を殺せる者は崎野と優美香だけなのだから。

優美香が神様になった時、「彼」はまた人間としてこの世に現われる。

そして悪魔の女の子が、彼を待っている。

天使達は新しい神様を待っている。
もう老いてかつ時代遅れの神様に、何の魅力も感じていない。

この平和な世の中にあるものは、厳しくて苦いものばかり。
それを愛せない神様では人間に気まぐれな甘さしか与えない。

「さて、そろそろ行ってくれない？」崎野は二敗目のコーヒーを飲み終えた。
「追い出すわよ」

優美香の黒い髪がなびく。

「あなたって、本当に容赦ないわね」

艶やかな髪を耳にかけて、窓から出ていく。

「じゃあ、ちょっと殺してくるわ。神様」

その言葉を置いて。

「容赦ないのはどっちよ」

崎野はため息を吐いた。

「邪魔、しにいくんでしょ？」

崎野の配下となった悪魔が言う。

強力な力がなくなつて安心したのか、こたつに入って崎野の一人ごとを聞いていた。

栗色の髪につり目だが愛らしい瞳。

崎野は悪魔にココアを飲ませる。

「いらないものばかり私にくれるんだから」

そう言いつつも、忠実にココアを飲む。

「優美香という人間の女の子が神様になったら」

崎野は悪魔の女の子に笑顔を向けて

「あなたと彼は結ばれるわ」断言した。

ココアを飲みつくした悪魔は、心の中で疑いが晴れているわけではない。

でも、安らかに笑った。「ありがとう」そう言った。

「でも私は」悪魔はそっと、天使の竖琴のように柔らかく美しい声を放つ。

「あなたが神様になればいいと、本当に思うわ」

美しい悪魔。

彼女なら、今の神様も好きになるかもしれないな。

崎野は心に留めておいた。

神様が悪魔を食べてしまった時、
神様は死んでしまう。

とても、簡単に。

神の死

「優美香さん」

呼び止められ後ろを振り向く。そこには悪霊がいた。

「え？悪霊？」

悪霊が、悪魔や天使に近づくことは珍しい。

というか、ありえないと言えるほどないことだ。

悪霊にとって、天使も悪魔も煩わしい存在のはず。

いいように利用する者、そう捉えているはずだ。

どくん。

急いではいたが、悪霊に興味を持ち、止まった。

この悪霊に、鎖がない。だれかに外してもらった直後だろうか。

「すみません。お忙しいところ呼びとめてしまい」

「いいえ」優美香は悪霊を見る。

どくん。

人間の優美香が何か反応している。

「神様のところへ行かれるのですね」

「ええ」

「私も連れて行ってくれませんか？」

何か疑わしい。

「どうして？」 優美香は正直に聞く。

「理由は、今は、お話しできません」 悪霊は丁寧に答える。

「申し訳ないけど、得体のしれない者は」

そう言つて優美香は悪霊を吸収する準備をする。人間の優美香が何かを叫ぶ。

「ここで消すわ」

悪霊は残念そうに笑った。

「そうですか」

そうして、大人しく吸収された。

悪霊の力が優美香を覆う。

「ごめんね。私は悪魔だけど悪魔じゃない。契約を交わす時間が無いのよ」

「あなた、強いのに」 違和感は、吸収した後も拭えなかった。

どくん。

人間の優美香が煩わしい。

本当に邪魔な存在。

もうすでに何の力もないくせに、何度も優美香に反応させる。

さっきの件だつてそうだ。

普段の優美香なら悪霊を見た瞬間に吸収するだろう。

今は力がほしい。

なのに躊躇した。

どくん。

神の子とはいえ、人間に邪魔されるといふのは屈辱だった。

「くそっ」

優美香はやり場のない思いを胸に、くしゃくしゃに押し込んで、神

の世界に足を踏み入れた。

力がみなぎる。

あの悪霊は、なんだったのだろうか。

悪霊の力には、あの悪霊が持っていた力以上のものが吸収でき、優美香の力が急速に上昇する。

天使達が逃げ纏う神の世界。
もう廃れた。何が美しいのか。そんなものはどうでもいいとさえ思える世界。

神様がぼつり、一人いた。

「おかえり。優美香」
そう言って、神様は笑った。

どくん。どくん。

人間の優美香が邪魔をする。

「悪いけど、殺しにきたわ」優美香は無表情に告げた。

「ああ、待っていたよ」神様は動じない。

「かわいい私の子供達」そう言って微笑んだ。

神の死（後書き）

これで、この話はおしまいにしてもよかったです。が、
もう少し続けます。

次が最終話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9163r/>

悪魔か天使の女の子

2011年11月10日08時07分発行